全国ドーポラヴォーロ事業団主催 「トレ・ヴェネツィエ国民住宅家具コンクール」にて 見出される「公共の趣味」について

ドーポラヴォーロの建築における近代性の研究 その1

ON “THE TASTE OF THE PUBLIC” FOUND BY THE OPERA NAZIONALE DOPOLAVORO
IN THE CONTEST OF THE FURNISHINGS FOR THE PUBLIC HOUSING
IN “TRE VENEZIE” IN 1927

A study on the modernity in the architecture of Dopolavoro in Fascist Italy Part 1

奥田 耕一郎*

Koichiro OKUDA

The purpose of this study is to reveal the circumstances of the first contest of the furnishings for the public housing in “Tre Venezie” organized by the Opera Nazionale Dopolavoro (O.N.D.) in 1927. It was found through the study that the result of the contest was different from what the O.N.D. expected and the O.N.D. concluded it as an “experiment”. In addition, the O.N.D. found this reason as a shortage of “the taste of the public” in the furnishings produced by the contestants, then began to recognize its realization as one of the aim of the national contest in 1928-29.

Keywords : *Modern architecture, Dopolavoro, Opera Nazionale Dopolavoro, Fascism, Italy*

近代建築, ドーポラヴォーロ, 全国ドーポラヴォーロ事業団, ファシズム, イタリア

1. はじめに

1-1. 研究の目的

近代建築史は従来、芸術、産業、政治との関連において理解されてきたが、近年の政治学、社会学の分野では、近代の余暇とその組織化がこれらの文脈を横断するものとして注目されている^{注1)}。

2大戦間に誕生した余暇制度のうち、最も成功を収めたもののひとつとして知られるのが、ファシズム期イタリアにおける「ドーポラヴォーロ Dopolavoro」制度である^{注2)}。ドーポラヴォーロとは、労働者の余暇を編成・管理・実施する制度、組織および活動の総称であり、1925年5月1日の法令により「全国ドーポラヴォーロ事業団 L'Opera Nazionale Dopolavoro」（以下 O.N.D.）が設立されると、地方自治体や企業を活動の単位として、公的かつ組織的な運営が行われるようになった。同事業団は第二次世界大戦終戦の1945年まで存続し、戦後まもなくその後継機関 ENAL（Ente Nazionale Assistenza Laboratori, 国立労働者支援公団）が設立された。この ENAL も1978年には廃止され、国営のドーポラヴォーロ活動は終焉を迎えるが、活動そのものは現在も行われている。

建築の分野における O.N.D. の事業は、主に社会支援事業としての低所得者層の生活・居住環境への介入と、余暇活動提供のための施

設整備の2つに大別されるが、1933年を境に、後者により重点が置かれるようになることを確認している^{注3)}。このドーポラヴォーロは一般にファシズムとの関連において語られるものであるが、その活動に関連した建築についての理解は、ファシズム的要素との関連に留まらず、近代化の過程のなかでのファシズム期の建築の位置を考察する上でも重要であると思われる。ドーポラヴォーロの近代性に着目し、その建築との関係を考察するにあたり、本稿では住宅関連での O.N.D. の最初の事業となった1927年の「トレ・ヴェネツィエ国民住宅家具コンクール」を対象に、まずその実施経緯と内容を明らかにすることを目的とする。また、同コンクールの評価に際して浮上する「公共の趣味」という概念について、その意味や浮上の経緯について考察を行う。

1-2. 既往の研究

ドーポラヴォーロと関連する建築・空間・環境を中心的に扱った研究は、本国イタリアにおいても確認が難しいが、ドーポラヴォーロと住宅建築という問題に関連しては、K. コセッタによる研究^{注4)}が本稿と一部で問題を共有する。しかしコセッタの研究はファシズム期における住宅建築をフェミニズムの観点から議論するものであり、本稿と目的・対象を異にする。一方、建築とファシズムとの関係を

* 早稲田大学理工学術院総合研究所・理工学研究所
客員次席研究員/客員助教・修士(工学)

Visiting Assistant Prof., Research Institute for Science and Engineering, Waseda University,
M. Eng.

論じたものとしては、G. チュッチの著作^{注5)}が基礎的な認識を提供し、近年ではP. ニコロゾの著作^{注6)}がある。

ドーボラヴォーロの管理運営及び余暇活動のための施設に関連しては、O.N.D.が発足後まもなくして国家ファシスタ党との結び付きを強めていったため、国家ファシスタ党の地方支部「カサ・デル・ファッショ」内にドーボラヴォーロの地方事務局等が置かれることも珍しくなく、一般にはその機能の範囲内に留まるかたちでしか捉えられていない^{注7)}。国内では、1942年に佐藤武夫がドーボラヴォーロの建築を紹介する論考を著しており^{注8)}、O.N.D.による劇場・図書館の整備について伝えている。

制度としてのドーボラヴォーロに関する研究は、古くは同制度が確立する1920年代のものから確認でき、日本国内でも体系的な紹介が第二次大戦以前に行われているが^{注9)}、その現代的意味の考察、再評価という点においては、1981年のV. デ・グラツィアの著作^{注10)}をその嚆矢とする。国内では、北原敦の研究^{注11)}と高橋進の研究^{注12)}が広く知られるところであり、本稿でも参考とした。

1-3. 研究の方法

本稿では、O.N.D.による建築分野の2事業のうち、低所得者住宅に対する施策は主に1920年代後半から30年代初頭において断続的に行われたが、その最初の事業となった「トレ・ヴェネツィエ国民住宅家具コンクール」を対象に、O.N.D.が発行した各種出版物・定期刊行物を用いて、その経緯・内容を時系列に沿って明らかにする。

2. ドーボラヴォーロ制度とO.N.D.について

2-1. ドーボラヴォーロ制度およびO.N.D.の設立から廃止まで

ドーボラヴォーロ制度は、一企業のマネジャーであったM. ジャーニが考案した労働者の余暇制度で、アメリカ型の経営管理の手法のひとつとして研究されていたものである。1923年にジャーニは雑誌「イル・ドーボラヴォーロ」を創刊、その制度の普及に努め、イタリア諸都市において徐々に組織され始めたのち、1925年5月1日に国家機関としてO.N.D.が発足する。設立当初のO.N.D.は、監督官庁に国民経済省が置かれ、初代会長（Presidente）にはアオスタ公（R. Emanuele Filiberto di Savoia, 1869-1931）が就任した。その後1927年4月にアオスタ公がO.N.D.会長を辞任、全国ファシスタ党書記長A. トゥラーティ（Augusto Turati, 1888-1955）が後任となるが、このとき役職名を「特別コミッサーリオ（Commissario Straordinario）」に変更、ローマの中央事務局（Direzione Generale）を頂点とする組織の再編が行われた。1930年にはA. スターラチェ（Achille Starace, 1889-1945）が特別コミッサーリオに就任し、1932年11月からはファシスタ党直轄機関、1937年には「統帥＜ドゥーチエ＞」ムッソリーニの直属となった。第二次世界大戦におけるイタリア降伏後、O.N.D.の管理権は一時的に国家へ返還されたのち、1945年9月にその後継としてENAL（Ente Nazionale Assistenza Laboratori, 国立労働者支援公団）が発足する。そのENALも1978年には廃止され、国営の余暇組織は消滅するが、全国鉄道ドーボラヴォーロ協会（Associazione Nazionale Dopolavoro Ferroviario）などにおいて、組織的なドーボラヴォーロ活動は現在も行われている。

2-2. O.N.D.の機構と活動領域について

ローマに中央事務局を置くO.N.D.は、国内及び植民地の各支部を管理・統括するのみの機関であったが、全体の方向性や全国的な

イベントを実施する上では強力な権力を有していた。1927年以降、O.N.D.は全国的な指揮系統の整備に着手、各県都に県ドーボラヴォーロ（Dopolavoro Provinciale）を、県下の各都市には市町村ドーボラヴォーロ（Dopolavoro Comunale）を置いた。市町村ドーボラヴォーロの事務局および関連施設は、「カサ・デル・ファッショ」内に設置されたほか、新築される場合もあった。O.N.D.へ編入された既存の地域サークルや、企業が自身の労働者のために設立した企業ドーボラヴォーロは、余暇活動の最末端の拠点単位であり、市町村ドーボラヴォーロがその監督にあたった。このほか、鉄道ドーボラヴォーロ、郵便通信電話ドーボラヴォーロ、軍ドーボラヴォーロなどの国家ドーボラヴォーロと呼ばれた公務員のドーボラヴォーロは、O.N.D.が直接管理した。

ドーボラヴォーロは、労働と余暇の時間を明確に区別することをその発想の基礎に置くが、これは労働者の周囲にある空間を、労働に従事する空間と、余暇を過ごす空間に二分することを意味した。1933年発行の『全国ドーボラヴォーロ事業団の実現と発展』^{注13)}によれば、ドーボラヴォーロ活動は体育事業、芸術事業、教育事業、社会支援事業の4領域に分類されている。このうち、体育、芸術、教育事業における施設整備と、社会支援事業における低所得者層の生活環境への介入の2つが、建築の分野におけるO.N.D.の施策と活動の中心であった。すなわち、労働者の余暇の空間は、ドーボラヴォーロ活動の空間と居住空間へと、さらに分割されたのだった。

3. 低所得者向け家具コンクールの構想

1927年4月、O.N.D.の会員向け機関誌「イル・ドーボラヴォーロ IL Dopolavoro」は、「ドーボラヴォーロスタはいかにして「幸福な住宅」を実現するか」^{注14)}と題した小論と、低所得者向けの住宅に設置されるべき家具を募集するコンクールの要項案を掲載した^{注15)}。この小論と要項案のなかで、O.N.D.は全国的なコンクールの実施をすでに構想しており、この発表は低所得者住宅に対するO.N.D.の最初の事業構想であるとともに、以降1929年まで続く一連の家具コンクール事業の始まりでもあった。

小論中で「幸福な住宅 Casa felice」は「こんにち大都市の郊外で建設されている＜経済的・超経済的住宅 Casa economica ed ultra-economica＞」^{注16)}として、国民住宅公団（ICP: Istitute per le Case Popolari）の供給する集合住宅が想定されていた。その1住戸は居間、寝室の2室と台所から構成されるとして、さらにこれらの構成要素を想定し、要素それぞれについて、仕様とまでは言えないまでもO.N.D.の要望を事細かに記した（表1^{注17)}）。要望中からは、素材の選択、簡素さの要求と贅沢品や模造品の否定、衛生的な配慮が、O.N.D.の中心的な関心としてうかがえる。小論中での個々の要望の記述は各室ごとに列挙するというかたちをとっているが、いずれも各室の仕上げについての記述と、家具や室内装飾品、設備についての記述に整理することができ、特に寝室に関しては、室内での家具の配置についても述べられている。また同小論は、ICPの住宅の内部が「空間の合理的用法について計算されている」ことを評価し、住宅内部で家具が占有する空間は最小限に留める必要があるとした^{注18)}。これに続くコンクールの要項案（表2^{注19)}）は、小論の内容を要項の形式にまとめたものと考えて良く、その目的は「美しさ、良き趣味、耐久性、実用性、手ごろな価格の基準に定める、労働者かつ

表 1 「ドーボラヴォリスタはいかにして幸せな住宅を実現するか」
(1927 年 4 月) における O.N.D. の居間・台所・寝室に対する要望

居 間		
仕 上 げ	床	・理想は寄木張り ・こんにちはコンクリートタイル張り ・衛生的・美的観点において完璧なリノリウムであればより良い ・目立つ色での塗装は不快である ・自然のままの木材、または塗装された、あるいはラッカーで仕上げられた木材より美しいものはなく、一般的な木材による寄木模様も等しく美しい
	壁	・明るい色か、白色か、柔らかな色調と調和のある壁紙で仕上げられるべき ・フリーズは壁の装飾を幸福に仕上げる ・フリーズは可能であれば木材とし、壁を痛めずに絵画や版画を吊せるようにする
家具 一般	素材・形態・色調	・簡素でなければならず、木製が一般的 ・統一された好ましい形態と色調からなっていればより良い ・醜悪な彫刻が過剰にほどこされた家具や、いわゆる様式家具の模造品は捨て去り、幅広い要求と簡素さを求めること
	個々の家具	・合理的に配置された丈夫なテーブル、快適な背もたれ付きの籐あるいはわら縄の椅子、二段のビュッフェと、中身のよくつまったソファ（ミシン縫製）が、効果的な調度品一式となる ・できる範囲で置くことのできる小さな本棚あるいは簡素な書架は、大人には選ばれたよい本を、子供には美しい挿絵が載った本を与えるだろう
室内 装飾品等	素材等	・醜悪な小物を棚に置くことは趣味の悪さを積み重ねることである。 ・金属製品や革製品は、室内の雰囲気の軽快な調子を損ねる。 ・陶磁器も、同様に簡素さと良き趣味によって選ばれるべきである
	布製品等	・カーテンの色は白で、軽い生地でできたものでなければならない ・日よけのマットは調和のある軽い生地から作られたもの ・ドレープ、刺繍、タッセルは高価で、室内を暗くし、埃をため込む ・軽い生地の広いランブシェードは、まばゆい電灯の光を中心に向け、テーブルに向かう家族を親密さの下に集める ・控え目でふさわしいテーブルクロスのかかったテーブルでくつろぐ主婦は、親しい家族を食事に招くであろう
	花瓶・水差し・壺	・置物、磁器の花瓶、あるいは陶器の水差しの配置と選び方にもこだわるべきである。 ・すばりとした棚や持ち送りの上には、室内を飾る植物、あるいは繊細な色調で調和のある輪郭の陶器製の花瓶がおそらく置かれるだろう ・天然の花を差したクリスタルの壺は、良き趣味を漂わせ、みずみずしきとともに視線を休ませる。 ・道花は最悪の趣味であると示しておかねばならない。命もなく香りもない道花は、自然の美から人間を遠ざけるもので、陳腐な素材からなるそれは、まさに埃の花托となる。
そ の 他		・居間は玄関を兼ね、空間を経済的に使用する ・家族団らんの場における楽しみの不足によって足が向いてしまう居酒屋を、家長から遠ざけるのは住宅の快適さである、と覚えておくのは、必要ないことなのである。
台 所		
仕 上 げ	床	床は釉薬がけの陶器で、同種の幅木が用いられているのが好ましい。
	壁	壁は白く清潔で、できるだけ洗えるのがよい
家具・設備 一般	調理台	含まれるべき絶対に必要な家具は、不要なものを収納できるよく検討された調理台である。検討が不十分であれば、それは汚れの原因である。
	テーブル	テーブルは必要があれば洗えるよう、無彩色の天然木で作られねばならない。
	棚	ほうろうの小さな棚は、台所の設備のひとつであり、火元の近くに置かれる。
	炭入れ	炭を入れる容器は蓋で守られていなければならない。
	換気	火元の上に、湯気を逃がすためのフードが不可欠である。
	流し	石か石灰岩製の流しは日光に直接に当たるように向けられ、乾燥用の棚から離れており、台所のなかの洗濯場に隣接した小さな場所に設置される。この流しは毎日清潔さの極みを求めるだろう。
	便所	(流しの) 隣りは、便所専用の場所となるだろう。それは窓を介して外とつながっており、洗面台が置かれ、日々の掃除に役立つだろう。
寝 室		
仕 上 げ	床	セメントのタイルか、鉛白を使い明るい色で着色された木材
	壁	・白いペンキ塗りか、明るい色の壁紙 ・居間と同様の格言として、壁には明るい色で楽しげな版画が吊り下げられる（と良い）。
家具 一般等	ベッド	ベッドは鉄製が好ましく、イギリス式の、可能な限り広く低いもので、天蓋やドレープ、カーテンのないもの
	マットレス	わら袋は柔らかすぎないマットレスになり、ベッドカバーは明るい色の羊毛製で、冬の間に必要な数以上は不要である。
	衣類の収納	・タンスは低く設計され、引出しと棚を備える。その上に折りたたみの三面鏡を置くことで、優れた結果をもたらす。 ・衣服とリネンを吊るクローゼットは奥行きが深く、下の仕切り板が衣服を押しつぶさないようにする。 ・幸福な解決法によって、タンスとクローゼットは 1 つの家具にできる。
	カーテン	モスリンのカーテンを備え付けることが望ましい。
室内 での 配 置	寝室	朝日が差すよう、寝室は東に向けなければならない
	ベッド	頭は壁に向け、足は部屋の中心に向くように設置。側面を自由にする。
	ベランダ・テラス	・リネンは一日のうちの良い時間帯に外で太陽の下に干すべきである。 ・この点から、寝室にベランダか小さなテラスを設置することが勧められる。朝の起床後、ドアと窓を開けることによって、寝室内に空気の流れを導くだろう。
	洗面台・鏡	・洗面台は、可能であれば外壁に向けて置かれるのが好ましい。 ・可能であれば、鏡の上に窓があると良い。こうすれば、鏡に向かったときに鏡に正しく光が反射し、顔が照らされる。これが不可能な場合は、洗面台をできる限り窓に近づけ、日光が左側から入るようにする。
そ の 他	子供の寝室	・子供が小さい頃は、両親の部屋で、父母のベッドと一緒に寝ることを勧める。ゆりかごはモスリンのカーテンを備える。 ・子供は（将来的に）できる限り別の部屋で寝るべきである。
	植物	寝室に鉢植えと花を置くと、日中に吸収した炭酸ガスを分解する

つましい事務労働者の住宅のための家具一式の量産を促進すること」と定義された。

4. 「トレ・ヴェネツィエ国民住宅家具コンクール」

4-1. 「トレ・ヴェネツィエ国民住宅家具コンクール」の公示

この要項案の発表から約 3 ヶ月後、O.N.D. はトレ・ヴェネツィエ地方^{注 20)} に地域を限定、「トレ・ヴェネツィエ国民住宅家具コンクール (Concorso delle Tre Venezie per l'ammobiliamento della casa popolare)」と題したコンクール事業の実施に乗り出し、1927 年 7 月 26 日付で公示、9 月 10 日応募登録締切、9 月 20 日提出締切という日程で実施された。表 3^{注 21)} に示すように、その実施要項は、4 月の要項案を雛形に、開催のために必要な応募方法・各種締切（第 9・10 条）、応募者への便宜（第 11・12 条）、展覧会場での販売事務所設置など販売に関する規定（第 13・14・15・18 条）、展覧会に進むための評価項目（第 16 条）、全国コンクールへの進出に関する規定（第 17 条）、展覧会来場者への交通の便宜（第 19 条）などの条項を追加したものとなっていた。このコンクールは O.N.D. とヴェネツィア県ドーボラヴォーロの主催で実施されたが、共催者であった「ヴェネツィア小工業協会・労働協会 (L'Istituto Veneto per le piccole Industrie e per il lavoro)」の主催により、9 名の建築家^{注 22)} による家具計画案の指名コンクールも並行して開催され、その要項には家具コンクールのものが準用された。

4-2. コンクールの結果

要項中の審査基準は、「手ごろな価格」「耐久性」「実用性」「作業の入念さ」「美しさ」を踏まえつつ、「豊富な民俗的感性」「国民住宅のための近代的な趣味」「労働者階級における一般的な生活様式」をよく表現したものを選考する、というものであった。一次審査の結果、実行委員会は 34 の事業者から台所 19 案、居間 35 案、寝室 21 案、任意提出の子供室 2 案を選び、1927 年 10 月 16 日から 10 月 31 日の間、ヴェネツィア・ビエンナーレのジャルディーニ会場（英国・フランス・ドイツ・チェコスロヴァキアの 4 バヴィリオン）で展覧会を行った。この展覧会は好評を博したようで^{注 23)}、一日平均 500 人、日曜日には 1500 ～ 2000 人の来場者を集めた^{注 24)}。また、実行委員会は会場内に販売事務所を設置し、出品作はここを通じて実際に国民に販売され、約 15 日間で 15 万リラを売り上げた^{注 25)}。

最終審査にあたり、実行委員会^{注 26)} は出品案の中から「コンクール要項にみごとに応えているもの」（カテゴリー 1）をまず 26 案選び、台所、居間、寝室についてそれぞれ 3 案、計 9 案を同列 1 等として選考、全国コンクールへの出品候補作とした。さらに、2 等 6 案、次点 3 案も選考し、表彰を行った。表 4^{注 27)} に示した 1 等案に対する審査評をみると、受賞案はいずれも素材、簡素さ、実用性などの観点から評価を受けており、O.N.D. は 4 月の要項案とその小論から引き続くこれらへの関心と、正式要項での審査基準に則して評価を行ったことがわかる。

計画案の指名コンクールでは、建築家 9 名が規定の 3 室を計画、計 27 案を応募し、うち各 1 室に対し 3 案ずつ、計 9 案が家具コンクールと同じ実行委員会によって選出され、同会期中、英国パヴィリオンで展示された。さらに、この 9 案から規定の 3 室それぞれにつき 2 案ずつ、計 6 案を同列 1 等として選出、全国コンクール出品候補作とした^{注 28)}。この審査評では、主として美的観点からの評価が述

べられているが、一切の表彰を受けなかった唯一の案に対する評価は、「決定的にテーマから離れており、完全にブルジョワ的室内環境」^{注29)} というもので、計画案のコンクールにおいては特に、華美を避けた簡素さが求められたことがわかる。

4-3. 要項と出品作との齟齬について

しかし、展覧会の好況の一方で、その出品作には要項との相違も少なくなかった。実は、要項第17条で同列での1等を「3社」に与えるとしたとき、3室全てを一式として出品した場合が想定されていたが、一次審査の結果、全3室の展示を認められたのは34社中13社のみで、実行委員会はその13社中からも一式での受賞に値する作品を選ぶことができず、各室を単位として9案を選出したという経緯がある^{注30)}。居間・寝室の2つが1等に選出されたスクレミン兄弟 (Fratelli Scremin) に関しても、台所の案は他の2室より劣るとして2等となった^{注31)}。また、個々の家具それぞれの価格の明記が義務づけられていた(第8条)ことに反し、1室セットの価格のみを示した業者もあった。O.N.D. 会員に向けた10%以上の割引販売(第18条)に対しても、割引前の価格を示さなかった業者があり、クローツェ家具社 (Mobilificio Croze) の寝室案(1等、表4中9)、居間案(2等)では価格が付されていなかった。さらに、価格自体に関しては、1等・2等・次点に選ばれた作品に限定しても、台所の家具1組が299〜1,250リラ、居間が480〜1,810リラ、寝室が1,420〜2,800リラと、各室を構成する家具数に違いはあるものの設定価格に幅があり、1等の9点に絞ることで、800リラ前後、1,000リラ前後、1,400リラ前後と、ある一定の価格帯に落ち着く^{注32)}。これに比して、次点となったアポローニオ社 (Ditta Angelo Appolonio) の寝室案には、相対的にとりわけ高い価格(2,800リラ)が設定されていた。このことから、要項で謳う「控え目な価格」も、審査段階で指標のひとつとして機能していたことが推測される。

表2 1927年4月の要項案

	項目	内容
第1条	主催者・事業の名称	主催：州都のドーボラヴォーロが望ましい 開催月：未定 仮称：住宅の経済的家具・州コンクール
第2条	事業の目的	美的規範、良き趣味、耐久性、実用性、手ごろな価格に応える、労働者をつつましい事務労働者のための家具一式の生産を促進すること
第3条	参加資格	・この家具の製造業に従事する国内の全ての事業者 ・材料はイタリア産でなければならない
第4条	テーマ	a) 台所 b) 寝室 c) 居間(玄關を兼ねる)
第5条	家族構成の想定	父・母・子供2人の4人家族 何らかの室を1つだけ、任意で示してよい(おそらく子供室となる：年長の子供の部屋を1室)
第6条	各室の必要条件	a) 台所:食器台つきの食器棚(ビュッフェ)×1、テーブル×1、椅子(プロトタイプ)×1 b) 寝室:二人用ベッド×1、サイドテーブル×1、クローゼット×1、鏡付き洗面台、椅子×1、コート掛け×1 (注:任意の子供室には、ベッド×1、洗面台×1、洋服ダンス×1、コート掛け×1、椅子×1) c) 居間:折りたたみ式テーブル×1、食器棚にもなるガラス扉付家具×1、本棚×1、置物・花瓶・その他を置くための持ち送りの棚×1、ソファ(任意)、椅子×1、安楽椅子×1 (注:小物、装飾品、照明一式、置物その他は任意(選考対象外)。これらも良き趣味で、いかなる人の手にも届くように最小限の価格に留める。)
第7条	家具の寸法・形態	・家具の大きさについては、今日の経済住宅・超経済住宅に適するよう配慮する。 ・その地方固有の、民俗的で、イタリアの伝統に則した個性をもつ形態とする。 ・評価項目:1) 価格 2) 耐久性 3) 実用性 4) 作業の入念さ 5) 美的な良さ
第8条	価格の表示	室ごとの個別の価格と、全3室1組の価格を表記すること。家具個々の価格も表示すること。
第9条	展示設営	出品者は自身で展示ブースの設営を行うこと。その費用も出品者が支払うこと。
第10条	表彰・支払いへの便宜	・技術・美術委員会の評価により、最も優秀なものを表彰する(勲章、賞状、美術品その他を副賞として予定) ・出品者はドーボラヴォーロ会員にむけた家具一式の制作と特別割引のために努力すること。 ・分割払いの可能性についても考慮すること。

4-4. 「公共の趣味」という標語について

この要項と出品作の齟齬に関して、O.N.D. は要項を重視する立場をとり、事業の目的を述べる要項第2条の「良き趣味」を議論の中心に据えてこのコンクールの総括を行うが、このとき「公共の趣味 Il gusto del pubblico」という概念が浮上してくる。

美術史家 U. ネッピア (Ugo Nebbia, 1880-1965) は「公共の趣味」と題したコンクール評^{注33)} を著し、O.N.D. 中央事務局発行の役員向け機関誌「Opera Nazionale Dopolavoro. Bolletino mensile」1928年3-4月合併号(以下「月報」)^{注34)} にこれが掲載された。この「月報」は、全国コンクール開催に向けた特集号であり、トレ・ヴェネツィエでのコンクールが終了し、全国コンクールが公示となった時点で発行されたものである。全体は序文と3つの章から構成され、第1章では全国コンクールの目的や要旨、基準を述べ、第2章には3部門制

表3 1927年7月トレ・ヴェネツィエのコンクール・正式要項

	項目	内容
第1条	主催者・事業の名称	主催：O.N.D.、ヴェネツィア県ドーボラヴォーロ 共催：ENAPI、ヴェネツィア小工業協会・労働協会 展示会期：1927年10月16日〜10月31日 於ヴェネツィア・ビエンナーレ会場
第2条	事業の目的	美的規範、良き趣味、耐久性、実用性、手ごろな価格に応える、労働者をつつましい事務労働者のための家具一式の量産を促進すること
第3条	参加資格	・トレ・ヴェネツィエ地方の事業者に限定する。 ・材料はイタリア産でなければならない。
第4条	テーマ	a) 台所 b) 寝室 c) 居間(玄關を兼ねる)
第5条	家族構成の想定	父・母・子供2人の4人家族とする。 年長の子供の部屋を1室、あるいは何らかの室を1つだけ、任意で示してよい。
第6条	各室の必要条件	a) 台所：食器台つき戸棚×1、テーブル×1、椅子×1 b) 寝室：二人用ベッド×1、サイドテーブル×1、クローゼット×1、鏡付き洗面台、椅子×1、コート掛け×1 (任意の子供室：ベッド×1、洗面台×1、クローゼット×1、コート掛け×1、椅子×1) c) 居間：折りたたみ式テーブル×1、食器棚としても使用可能なガラス戸棚×1、本棚×1、置物用の持ち送り棚×1、ソファ(任意)、椅子×1、安楽椅子×1 (注：照明一式、装飾品、置物その他は任意(選考対象外)。良き趣味で、全ての人の手に届くよう最小限の価格に留めること。)
第7条	家具の寸法・形態	・寸法は今日の経済的住宅に適する合理的なものにすること。 ・イタリアの純粋な伝統における地方特有の個性から着想すること。 ・以下の点を考慮すること：1) 価格 2) 耐久性 3) 実用性 4) 作業の入念さ 5) 美しさ
第8条	価格の表示	・社名を明記すること。芸術家の考案であればその氏名も明記。 ・室ごとの個別の価格と、全3室1組の価格を表示すること。個々の家具の価格も表示すること。 ・これらを記した表をヴェネツィア県ドーボラヴォーロ事務局(パラッツォ・ドゥッカラー)に送付すること。
第9条	登録締切	1927年9月10日
第10条	提出期限	作品は1927年9月20日の20時までに展示箇所に搬入する。輸送は通常の割引制度を利用し鉄道で行うこと。費用はすべて自己負担。
第11条	交通の便宜	出品者は鉄道運賃を往復30%引とする。
第12条	保険・展示設営と撤去	展示中(9月20日から閉会の3日後まで)はO.N.D.が保険と展示スペースを無償提供する。
第13条	作品の展示会場での販売	会場中にO.N.D.の販売特別事務所を設置。契約・販売はすべてこで行う。
第14条	作品の展示会場での販売	展示者による直接の販売は不可。販売事務所が優先権を持つ。
第15条	販売手数料について	販売が成立した場合、O.N.D.は価格の5%の手数料を受け取る。
第16条	審査方法と表彰	○技術委員会が評価。カテゴリー1(コンクール公示にみごとに応えているもの)とカテゴリー2(十分には応えていないもの)に分割。 ・カテゴリー1に入った出品者全員：銀勲章(その他)・入選証書(政府・事業団・自治体等の提供による勲章等の副賞を入選者に授与。) ・カテゴリー2に入った出品者：参加賞 ○最優秀賞は同列で3組選考。以下をよく表現したものを選考する。 1) 豊富な民俗的感性 2) 国民住宅のための近代的趣味 3) 労働者階級における一般的な(生活)様式
第17条	全国展示会への進出	1等受賞の3社は、ローマでの全国展示会に出展する。技術委員会はこれらの出品者へ、全国展に向けての改良と変更の提案を行う。
第18条	割引・価格設定	・出品者は価格を明示し、注文を受けた場合には表示価格を上回らないように努めること。 ・O.N.D.の会員には10%以上の割引を行う。 ・一式での販売を適切に約束する保証と方法をもって、会員の分割払での購入の可能性に備えておくこと。
第19条	観覧者への便宜	・トレ・ヴェネツィエ地方と近郊のドーボラヴォーロ会員向けに、O.N.D.は展示会観覧のための遠足を企画。来場者の鉄道運賃には50%の特別助成を行う。 ・10月は国内全駅からの運賃を30%助成する。

となった全国コンクールの正式要項を掲載し、第3章は1927年4月の「イル・ドーボラヴォーロ」における小論、要項案の再録と、トレ・ヴェネツィエでのコンクールの記録が収められている。この第3章には、「公共の趣味」を論じるテキストがネッビアの評論を含め2つ掲載されており、これらの分析を通して「公共の趣味」の検討を行う。

まず、ネッビアの評論における、彼のコンクールの結果とその状況に対する認識とは、展示された家具の使用者として想定されている「労働者とおつまいし事務労働者」は、現状で良き趣味を有しておらず、一方の出品者である家具業者は、一部しかコンクールの要求に応えていないというものであり、このコンクールは「人々の頭脳だけでなく、我々の学校、店、仕事場、市場を、研磨され、着飾

られ、新旧の全ての様式のゴミに混じり、二流以下の美的・技術的基準によって複雑にされ、大多数の人々が喜びを口にすることもなくやむを得ず使用している誤った種の家具から開放すること」^{注35)}に関わると述べた。またこれと同様に、「我が国民を、ありふれた趣味による様式の複製の類ではなく、実用のみ即し十分に検討された本物の趣味へと戻し、装飾的な付属品や彫刻、化粧張り、うわべの塗装、研磨などの類による虚飾を排した簡素な形態へと、また素材の適切さと線の論理的な単純化による生き生きとした外観及び秩序へと戻し、誤った様式的輪郭から、ありふれた模造品から、見せかけの上品な素材あるいは偽りの芸術的付属品の見せかけから遠ざける」^{注36)}と述べられているが、ここで良き趣味は直接的に語られ

表4 1927年7月トレ・ヴェネツィエでのコンクール・1等案とその審査評

出品者	受賞案	内容・価格	審査評・全国コンクールに向けての修正項目	副賞	写真
1 Ditta Lino Berger (ボルツァーノ)	台所	戸棚付食器棚 リノリウム製テーブル 椅子2脚 : 735 リラ	それぞれの細部、実用面、線の簡素さ・上品さへの配慮とともに、白と黒に塗装されたモミ材で、十分によく作られている。 修正項目：黒に塗装された部分を深く濃い青とすること。	G. ヴォルピ・ミスラータ 公賞 (銀細工製品)
2 Istitute per il Promovimento delle piccole industrie per Trieste, Istria e Carnaro (カルナーロ)		食器棚 テーブル 椅子2脚 準備用テーブル : 800 リラ	塗装されたモミ材による。純粋な国民的プロトタイプであり、実用性と構成に対する優れた資質に新鮮さ・華やかさを結びつけている。 修正項目：なし	法務大臣 A. ロッコ賞 (獅子のブロンズ像)
3 Ditta Giovanni Concina S. Samuele (ヴェネツィア)		食器棚 引出付テーブル 椅子2脚 : 1,250 リラ	(建築家 B. デル・ジュディチェ (Brenno del Giudice) によるデザイン) モミ材の天然仕上げにより、最良の組立と仕事が行なわれている。食器棚は良き趣味にあふれ、ヴェネトの家具の伝統を近代的な様式に仕上げている 修正項目：椅子を、食器棚とより良く調和する他のものに交換すること。食器棚の上部の棚を簡素さと実用性をより示すために単純化すること。	ヴェネツィア商工会議所 賞 (銀浮彫プレート)
4 Fratelli Scremin (ペルーノ)	居間	折りたたみ式テーブル 食器棚 椅子1脚 安楽椅子1脚 : 859 リラ	モミ材と桜材によって、寝室と同様に作られている。折りたたみ式のテーブルと、美しい食器棚・安楽椅子の問題を見事に解決している。 修正項目：1本とした椅子の前脚をテーブルと同様に2本脚に交換すること。	産業総連盟賞 (銀杯)
5 Ditta Giovanni Fantoni & C. (ジェモナ)		引出付テーブル 食器棚 椅子4脚 : 1,810 リラ	継ぎ目のないクルミ材による。近代性への清き精神によってフリウリの良き伝統を再生している。実用的で、技術的にも完璧で、そして十分に美しい家具の一例を示している。 修正項目：なし	国民労働大臣 G. ジュリアーティ賞 (勳章)・商工会議所賞
6 Mobilificio Torossi (ウーディネ)		食器棚 テーブル 椅子4脚 皿置き : 1,130 リラ	研磨したスラヴォニアのブナの板材と彩色されたモミ材により、好ましい上品さに向け、最良の構成と実用性が結びつけられ、華やかさと清々しさをつつまいし労働者の住宅に捧げている。 修正項目：なし	ヴェネツィア支庁賞 (金勳章)
7 Fratelli Scremin (ペルーノ)	寝室	ベッド タンス サイドテーブル 洗面台 鏡 椅子1脚 : 1,345 リラ	要項に最も良く応えており、家具は丈夫に作られていて、その線は単純で質素、よく整えられたトネリコ材のパネルによって豊かなものになっている。トネリコ材によって組み立てるためのシステムと、トネリコとともに2つの端部を作るモミ材の骨組が興味深い。 修正項目：洗面台が低すぎるので改めること。	国家統帥 B. ムッソリーニ賞 (漆塗喫煙具一式)
8 Ditta Ing. Carlo Delugan (メラーノ)		ベッド タンス 洗面台 サイドテーブル 椅子1脚 マットレス : 1,430 リラ	見事なカラマツ材によって、完璧な芸術的基準によって作られており、単純な構造を持ち、美しい木目によって彩りを与えられている。 修正項目：鏡付きの洗面台をひとつ、デザインして示し、ヴェネツィアで展示したものと交換すること。この寝室の他の家具とともに線の質素さと単純さをつくるためにはこの方がよく、これに了承された。	ヴェネツィア県知事賞 (陶器製花瓶)
9 Mobilificio Croze (ヴィットリオ・ヴェネト)		ベッド サイドテーブル クローゼット 鏡台付洗面台 椅子 コート掛け : 価格表示なし	(画家 L. ロヴァリーニ (Luisa Lovarini) によるデザイン) カバ、トネリコのパネルと、ブナ材による。近代性と良き趣味から研究された直線的な構成による。 修正項目：椅子と洗面台を、パース図面で示したものと同様のものに交換すること。カラーラの大理石の化粧を他の色大理石に交換すること。	P.N.F 書記長 A. トゥラーティ賞 (銅製美術制作作品一式)

るのではなく、好ましくないものとの対比によって語られている点が注目される。ネッピアの認識では、このような例が展示作品中の大部分を占めていたものであり、これはそれらを形容したものでもあったが、一方で良き趣味は具体的に示されていない。また、「公共の趣味」を国民に戻さなければならないという捉え方にも注目される。つまり、人々は良き趣味を忘れていているという認識であり、望ましくない家具を展示してしまった家具業者は、より一層の努力に基づいた具体的提案として、現時点では明瞭に把握されていない良き「公共の趣味」を示し、これをもって人々の趣味を回復させる必要があるとネッピアは訴えた。また、その際に必要なものは要項の遵守であるとし、さらにこのとき家具細部を構成するものは「住宅への愛」^{注37)}であると述べている。

「公共の趣味」を論じるもう1つのテキストは、このネッピアの評論に続いて掲載された、トレ・ヴェネツィエのコンクール閉会に際しての総括^{注38)}である。この総括には著者名が記されていないが、主催者側の視点で論じられており、O.N.D.の関係者によって書かれたものと考えられる。この総括は要項を第一とする立場を採り、各業者の努力について惜しめない賛辞を述べ、コンクール全体としては成功であったと表明する。しかしその一方で、「この経験が示すものとは、我々の家具業者が根本的な問題から未だ遠きにあるとするなら、非美的、非実用的、非経済的な悪しき製品が慣例であった長き時間の中で墮落した公共の趣味は、経済的家具の製作に対する要望と趣味の洗練へと正確に方向付けられた我々のコンクールにおける基本的原則からより一層の遠きにある、ということなのである」^{注39)}と語り、出品作に対しては趣味の問題から否定的な認識を示した上で、このコンクールを「最初の実験」^{注40)}として位置付けた。「公共の趣味」に関しては、直接的表現は試みられず、「芸術的で豪華な家具の気取った模造品」^{注41)}というよう、ネッピアと同様に好ましくない例との対比によって示している。また、良き「公共の趣味」はかつて存在したが現在は「墮落」してしまっており、それを取り戻さなくてはならないというネッピアと共通する理解が示されているが、この総括ではこれを「根本的な美的、衛生的、そして簡素な良き趣味の原則への回帰」^{注42)}と表現し、この「原則」を「つつましき人々の遺産」^{注43)}であると述べ、さらに過去において「いかなる職人も芸術家であった」^{注44)}として、「家具業者と芸術家の大規模な共同作業」^{注45)}への期待を表明した。

ところで、この総括とネッピアの評論の末尾には、それぞれO.N.D.による注釈がつけられていた。総括の注釈はトレ・ヴェネツィエのコンクール実行委員会に対する賛辞と、O.N.D.特別コミッサーリオのトゥラーティからの賛辞を記したものであるが、ネッピアによる評論の注釈は「我々が完全に同意するこの極めて重要な記事」^{注46)}として読者へこの評論に対する注意を促しつつ、今後「公共の趣味」が「ヴェネツィアで展示された最悪の事例の周辺へとむしろ偏向させられるかもしれない」^{注47)}ことから、O.N.D.の主催で実施される一連のコンクール事業における「善意と必要性」^{注48)}に対する認識の深化を求める。すなわち、ネッピアの評論はO.N.D.の主張を補強、代弁するものとして「月報」に掲載されており、総括とともにどちらもO.N.D.の意見とすることができる。この2つの記事はそれぞれ共通の見解を含んでいるが、「公共の趣味」はその共通要素だけでなく、さらにそれぞれの主張を加えたものとして把握される

のである。

そして、この2つのテキストが論じた「公共の趣味」という標語の示す内容は、「月報」で特集されている全国コンクールの要項に盛り込まれた。全国コンクールにおける、実際に家具を製作する第1部門「家具部門」の目的には、「庶民の住宅への趣味と愛の改善に貢献する」(第2条)^{注49)}という文言があり、第2部門「家具計画案部門」は、「家具芸術に貢献する若手を奨励し、考案者と家具業者の出会いを確立すること」(第3条)^{注50)}を目的のひとつとして新設され、同じく新設の第3部門「室内装飾部門」の目的には、コンクールの基準に従った品々の普及によって「労働者の趣味の向上に貢献すること」(第2条)^{注51)}が組み込まれている。

「公共の趣味」とは、その家具を使用する人々に適した簡素さ、実用性、低価格など、内容的にはすでに要項中に盛り込まれていた要素から成り立つものであるが、トレ・ヴェネツィエでのコンクールにおける要項と出品作の齟齬に直面したO.N.D.が、その不在というかたちで現状を表した標語であり、全国コンクールのための新要項作成につながるものであった。

5. まとめ

O.N.D.は低所得者層の住宅に適した家具の量産促進を目的として家具のコンクール事業を構想し、その計画を1927年4月に発表、その最初のコンクールをトレ・ヴェネツィエ地方で行うこととし、1927年7月の公示から同年11月の展覧会閉会まで、約4ヶ月にわたってこの事業を実施した。展覧会は賑わいをみせたが、要項に沿った家具はO.N.D.が期待するほどは集まらず、計画通りの表彰も行うことができなかった。

要項通りの結果が得られない現状を理解したO.N.D.は、コンクール閉幕後、自らこれを「実験」と評した。また、この要項と出品作の齟齬という問題は趣味の観点から総括され、O.N.D.はその「月報」1928年3-4月号で「公共の趣味」という概念を浮上させる。

「公共の趣味」はその不在として現状を表したもので、要項の重要性とその遵守を訴える標語でもあった。また「公共の趣味」の検討のなかで、O.N.D.はそれを具現化した家具によって人々の趣味を正し、家具の細部に「住宅への愛」を宿すことを求め、職人と芸術家の共同作業を望むようになった。これらの要望は、全国コンクールの要項へ組み込まれることとなった。

この全国コンクールの経緯と内容及びトレ・ヴェネツィエのコンクールとの連続性の検討、また一連のコンクール事業としての総合的な評価は、稿を改めて行いたい。

参考文献

- 1) Ciucci, Giorgio: Gli architetti e il fascismo, Torino, Einaudi, 1989
- 2) Ciucci, Giorgio: Stile estetici nel regime fascista, Gentile, Emilio ed., Modernità totalitaria. Il fascismo italiano, Roma-Bari, Laterza, 2008
- 3) de Grazia, Victoria: The culture of Consent. Mass organization of Leisure in Fascist Italy, Cambridge, Cambridge University Press, 1981 (豊下楯彦, 高橋進, 後房雄, 森川貞夫訳: 柔らかなファシズム イタリア・ファシズムと余暇の組織化, 有斐閣, 1989)
- 4) de Grazia, Victoria and Luzzatto, Sergio eds.: Dizionario del fascismo (2 vols), Torino, Einaudi, 2002-2003
- 5) ファシズム研究会編: 戦士の革命・生産者の国家 イタリア・ファシズム, 太陽出版, 1985

- 6) 北原敦：イタリアのファシズム，類似の運動，歴史学研究会編：講座世界史 6 必死の代案 期待と危機の 20 年，東京大学出版会，pp.139 ～ 171，1995
- 7) 北原敦：イタリア現代史研究，岩波書店，2002
- 8) Mangione, Flavio and Soffitta, Andrea eds.: L'architettura delle Case del fascio nella Regione di Lazio. Catalogo della mostra itinerante le Case del fascio in Italia e nelle terre d'oltremare, Firenze, Alinea editorice, 2006
- 9) Nicoloso, Paolo: Gli architetti di Mussolini. Scuole e sindacato, architetti e massoni, professori e politici negli anni del regime, 2nd ed., Milano, FrancoAngeli, 1999
- 10) Nicoloso, Paolo: Mussolini Architetto. Propaganda e paesaggio urbano nell'Italia fascista, Torino, Einaudi, 2008 (桑木野幸司訳：建築家ムッソリーニ 独裁者が夢見たファシズムの都市，白水社，2010)
- 11) Perulli, Virgilio: L'Opera Nazionale Dopolavoro nel sistema giuridico, Padova, Zannoni, 1934
- 12) 高橋進：ファシズム・国家・党：市民社会 - イタリア・ファシズムの中の 20 世紀，立命館大学政策科学会紀要 政策科学，第 11 巻 30 号，pp.41 ～ 52，2004.3

注

- 注 1) その一例として Corbin, Alain eds: L'avènement des loisirs (1850-1960), Paris, Aubier, 1995 (渡辺響子訳：レジャーの誕生，藤原書店，2000) を挙げる。
- 注 2) dopo (after) と lavoro (work) からなる造語。「仕事の後」(の時間) の意味で，労働後の余暇時間を指す。
- 注 3) 拙稿：1930 年から 1932 年の「Gente Nostra」誌にみるドーボラヴォーロ施設について，日本建築学会大会学術講演梗概集（東北）F-2 分冊，pp.111 ～ 112，2009.7
- 注 4) Cossetta, Katrin: Ragioni e sentimento dell'abitare. La casa e l'architettura nel pensiero femminile tra due guerre, Milano, FrancoAngeli, 2000
- 注 5) 参考文献 1，2
- 注 6) 参考文献 9，10
- 注 7) 一例として参考文献 8 を挙げる。
- 注 8) 佐藤武夫：建築に見るファシズム文化，柏熊達生著作者代表：ファシズム研究，イタリア友の会，pp.222 ～ 232，1942。佐藤はドーボラヴォーロの 1227 の劇場，940 の演劇図書館が新設され，1936 年までに 5034 棟の新設図書館が建てられたと記述している。その出典は明記されていない。
- 注 9) 柏熊達生：イタリアの厚生運動 ドーボラボーロ，泰文堂，1943
- 注 10) 参考文献 3
- 注 11) 参考文献 6，7
- 注 12) 参考文献 12
- 注 13) Opera Nazionale Dopolavoro: Realizzazioni e Sviluppi dell'Opera Nazionale Dopolavoro, Borgo San Dalmazzo, Istitute Grafico Bertello, p.17, 1933
- 注 14) 「ドーボラヴォリスタ dopolavorista」はドーボラヴォーロ会員を指す。
- 注 15) Il Dopolavoro. Settimanale dell'Opera Nazionale Dopolavoro, n.15, Anno V, Roma, 10 Aprile 1927
- 注 16) Opera Nazionale Dopolavoro. Bollettino mensile. I Concorsi Nazionali per l'Ammobiliamento e 'Arredamento Economico della Casa Popolare, n.3-4, Anno II, Roma, Marzo-Aprile 1928, p.129.
- 注 17) Ibid., Bollettino mensile., pp.129 ～ 133 より筆者作成
- 注 18) Ibid., p.134
- 注 19) Ibid., pp.135 ～ 137 より筆者作成
- 注 20) ヴェネツィア・トリデンティーナ，ヴェネツィア・エウガネア，ヴェネツィア・ジュリアの 3 地方の総称。
- 注 21) Ibid., pp.143 ～ 149 より筆者作成
- 注 22) G. ペリッツァーリ (Guido Pellizzari), G. ヴァルコーニ (Gildo Valconi), V. ヴァロット (Virgilio Valloto), F. バンテルレ (Francesco Banterle), A. スカットリン (Angelo Scattolin), E. ソットサス (Ettore Sottsass), G. ヴェンテル・マリーニ (Giorgio Wenter Marini), C. ミアーニ (Cesare Miani), G. ザックス (Giovanni Sachs) の 9 名。(以上「月報」掲載順)
- 注 23) 参考文献 3，p.260
- 注 24, 25) Ibid., p.224
- 注 26) 実行委員会 (Comissione Esecutiva) 本部はヴェネツィア県ドーボラヴォーロ事務局 (パラッツォ・ドゥカーレ) におかれた。実行委員会のメンバ

ー構成は次の通り。審査委員長：B. ラーヴァ (Beppe Ravà, ヴェネツィア小工業協会・労働協会会長)，G. ディ・ナルド (Guido di Nardo, O.N.D. 中央事務局代表) / 副委員長：A. ペッレグリーニ (Antonio Pellergrini, ヴェネツィア県ドーボラヴォーロ副代表) / 審査委員：G. エッレーラ (Gilberto Errera), R. ガッロ (Rodolfo Gallo), B. デル・ジュディチェ (Brenno del Giudice), V. ゼッキン (Vittorio Zecchin), R. ブラッティ (Ricciotti Bratti), R. ノビリー (Riccardo Nobili), D. トッレス (Duilio Torres), R. ベルトツツィ (Renzo Bertozzi), G. デローロ (Giuseppe dell'Oro), M. セーガ (Mario Segà) / 展示委員会：B. デル・ジュディチェ，G. エッレーラ，R. ノビリー，M. セーガ

注 27) Ibid., pp.227 ～ 235 より筆者作成

注 28) 審査評は Ibid., pp.236 ～ 239 に掲載。同列 1 等受賞者は次の通り。台所：V. ヴァロット，G. ザックス / 居間：G. ヴァルコーニ，A. スカットリン / 寝室：G. ペッリザーリ，G. ヴェンテル・マリーニ。2 等は C. ミアーニの居間の案。F. バンテルレの寝室の案のみが表彰を受けなかった。計画案のコンクールの審査評については拙稿：O.N.D. 主催「トレ・ヴェネツィエ国民住宅家具コンクール」(1927) の家具計画案部門について，日本建築学会大会学術講演梗概集（北陸）F-2 分冊，pp.211 ～ 212，2010.7 にまとめている。

注 29) Ibid., p.238。F. バンテルレの案に対する審査評。

注 30, 31) Ibid., p.230

注 32) Ibid., pp.151 ～ 189。出品作のカタログで，ここに価格の記載がある。

注 33) Nebbia, Ugo: Gusto del popolo, Ibid., pp.215 ～ 220

注 34) Ibid., Bollettino mensile.

注 35) Ibid, p.216

注 36, 37) Ibid, p.218

注 38) Chiusura della Mostra e del Concorso delle 'Tre Venezie' per l'ammobiliamento popolare della Casa, Ibid., pp.221 ～ 226

注 39) Ibid, p.224

注 40) Ibid., p.219

注 41) Ibid., p.225

注 42, 43) Ibid, p.224

注 44, 45) Ibid, p.225

注 46, 47, 48) Ibid, p.220

注 49) Ibid., p.82

注 50) Ibid., p.94

注 51) Ibid., p.100

図版出展

表 4 中，

1) Ibid., Bollettino mensile, p.157

2) Ibid., p.159

3) Ibid., p.160

4) Ibid., p.171

5) Ibid., p.166

6) Ibid., p.167

7) Ibid., p.165

8) Ibid., p.164

9) Ibid., p.158

(2010 年 5 月 17 日原稿受理，2010 年 9 月 21 日採用決定)